

福島カセツの 声紀行(聴こう)

本間清文 (東京都・ソーシャルケア研)

◎取材依頼があったが……

2013年9月、福島第一原子力発電所から30km圏内にある福島県南相馬市に1泊2日で行ってきた。主宰するメールマガジン「セルフケア」読者の元ケアマネ・レイさんからの手紙がきっかけだった。私はメルマガとホームページで長編インタビューを掲載しているので、その希望があったのだ。「南相馬市まで(レイさんの)インタビューの取材に来てほしい」と。震災から2年半ほど経過し、精神的に落ち着いてきたので、忘れないうちに自分の中の震災に関する記憶を話しておきたい、という。「3か月後に行く」と即答した。そんなことでお役に立てるならお安い御用だと思った。手紙には手づくりの手芸品である、小さなウサギが同封されていた。レイさんがつくったという。

しかし、しばらくすると、また手紙が来て「インタビューは私(レイさん)ではなく、仮設住宅(以下、カセツ)に住む介護家族や高齢者の方々、自治会長の話を聞いてほしい。本間さんの著書を見せたところ、『カセツに泊っていいから1泊2日くらいで、ここの住人のインタビューをしてもらえないか』」とのこと。自治会長から話があったらしい。私は「了解」した。そんなわけで南相馬市仮設住民の方へのインタビューをすることになったのだが、結論からいうと、このインタビュー取材は失敗に終わった。

◎南相馬に着いたものの……

カセツは6畳、4.5畳、ユニットバス、キッチン、トイレで一戸を構成し、それが26戸連なって、一つの集落を形成していた。

ある寝たきりのおばあさんの介護をしている世帯では大人3人で、その空間に住んでいた。収納スペースなどがほとんどないため介護ベッドを置き、周辺にオムツの山を置き、医療機器を置くと、それだけで6畳の部屋は占拠されてしまっていた。残りの4畳半に一人が寝ると、もう一人は「ベッドの脇の半畳ほどのスペースで寝起きするしかありません」とのことだった。

東京などの都市部と違い、もともと地域的に木造の大型の戸建てに住んでいるのが珍しくない土地だ。それが、原発事故の影響で元の家に居続けることができなくなり、カセツの狭小な空間に閉じ込められるような日常生活に一変したのだ。



レイさんから送られてきた
マスコット



カセツの様子

そのカセツ、「小池第二 応急仮設住宅」に住んでいたのは、多くが原発から半径 20km 圏内にある小高区の方々だった。カセツを訪れるとレイさんの案内の元、自治会長のほか、多くの住民の方が「よくぞ来ていただきました」と出迎えてくださった。さらに、レイさんは地元の地方新聞記者まで根回しして呼んでいたの、到着するや私にカメラが向けられた。カセツ全体がとても温かい雰囲気、その歓待の大きさは私に「しっかりとインタビューをしなければ」とますますプレッシャーを覚えた。



レイさんとカセツの人

が、一通りのあいさつを済ませ、私が取材にかかろうとすると、あきらかにいつものインタビューとは勝手が違うことに気づいた。インタビューの対象者はあらかじめ自治会長が3人ほどリストアップしてくださっていたが、誰も自らの体験や想いをベラベラと語ろうとしないのだ。こちらから質問すれば、それに対する答えは返ってくるものの、話はすべて表面的な部分で終わってしまう。私は個人的な想いや感情、体験談を聞きたくて質問するのだが、そういう話はかわされてしまう。震災という事象の大きさから多少は予期していたが、それ以上の寡黙さだった。

なぜだろうと考えたが、明確な答えなどわからない。私は自分の生まれ故郷を思いだした。そこはコンビニもないような山間部の集落で、狭い人間関係だけで動いている社会だった。「自我」や「個人的な見解」などはなじみにくい土地柄だった。自分の知見をマスコミなどの「よそ者」にベラベラと開陳することは恥ずかしいことでもあり、そういうことをする者は軽率な人間とさえ見る向きもあった。ある意味、日本的な土俗性のようなものといってもよいかも知れない。私は、どこか、そんな空気を感じていた。

そんなわけで、結局、1日目は大した話も聞けず、夜を迎えた。自治会長が「お酒はお好きですか。ささやかながら^{うたげ}宴をしたいと思っています」とおっしゃる。何も取材ができていないのに御馳走なんて肩身が狭いと感じたが、断るわけにもいかず、少しだけ御馳走になることにした。

カセツの集会所に即席の宴会が設けられ地酒、刺身、肉などがならんでいた。昼間、カセツ内がいかに「所有できない場所」であるかを見ていたので、その食卓を見たとき、「こうしたものを、この方々はどれくらいの頻度で食べられるのだろうか」と思った。もちろん、そう簡単に食べられるはずがなく、私の箸は進まなかった。

さらに、その後、別のおばさんがすき焼きを持ってきてくれた。「家の残りもの」と言ったが、見れば鍋の中の野菜も肉も盛りだくさんで、一目で私のためにつくってくれたのだとわかった。そのあとには別のおじさんが「家族が今日、釣ってきた」とヒラメの刺身をさばいて持ってきてくれた。「まだ、



南相馬の風景

何もしていない自分をなぜ、ここまでもてなしてくれるのだろう。しかも、インタビューをしてほしいといいながら、多くを語るわけじゃない。一体、何が望みなんだ……？」と私は混乱した。明日には帰らなければならないのに、何をすることが彼らの期待に応えることになるんだろう、と考えあぐねた。

◎内から見た外

結局、1日目は特別に深い話も聞けず仮設集会所の布団に着くことになってしまった。ひとりで天井を見上げていると、昼間、レイさんと自治会長がそれぞれに、別の場面で口にしていたことを思い出した。

「……東京オリンピックでますます、ここは取り残されてしまう……」。

ちょうど、その1週間ほど前に東京オリンピック招致のニュースが流れていた。それに2人は反応していた。

ちなみに震災から2年半経過しても、南相馬は震災直後からほとんど何も変わっていない。いまだに自動車が田んぼの真ん中に転がっており、倒壊しかかった住居が点在する。住民たちが大切にしていた田んぼは荒れ放題で雑草が生い茂っている。街に人影はなくゴーストタウン区域もあった。立ち入り制限区域では防護服姿の検問員もいた。「この状況下で東京オリンピックに共感できるはずがない」と思った。

取材の不調から、夜中になっても、なかなか寝つけずテレビのスイッチを入れた。チャンネルを回すと東京と同じ番組が流れていたが、一つだけ南相馬独自のチャンネルを行政が設けており、放射線量の情報などを流していた。しかし、それ以外は皆、都会の人間がつくった都会の人間向けの放送ばかりだった。芸能人が笑い、カラフルな商品の情報が洪水のごとく流れ、まるで別世界の平和なおとぎ話のようだった。だが、そのカセットは正反対の荒廃した集落だった。周囲には山しかなく、ゴーストタウンに囲まれた場所だった。「このテレビを見て、カセットの人たちは何を感じているのだろう。自分たちの存在は無視されていると思ってしまうのではないか……」と思った。そう考えると、昼間聞いた「……東京オリンピックでますます、ここは取り残されてしまう……」という言葉が実感としてわかる気がした。



レイさん

◎人はなぜ贈り物をするのか……

一夜明け、2日目も大した話を聞けないまま時間は過ぎていった。帰る時間が近づいてきた頃、レイさんが「お土産です」といって、また自分でつくった手芸品をくれた。それは何十個もあり、一つひとつに「応援ありがとうございます！南相馬市」と手書きメッセージが添えられていた。他にもカセットのおばあちゃんがつくった毛糸の手芸品、私の家族への土産、土地のお祭りを自家撮影したDVDなどなど、やはり贈り物の山だ



本間清文（ほんまきよふみ）●ソーシャルケア研究所代表。著書に「教科書が教えてくれないケアマネ業務」、「介護の現場がこじれる理由」（雲母書房）、「ケアプランの作り方」（秀和システム）など。間もなく登録者 800 名に達する無料メルマガ「セルフケア」では介護の大きな声で言えないあんなこと、こんな事、発信中。受付は selfcaremag@gmail.com まで（携帯可）。ツイッター@ kaigosien_net

った。ろくな取材をできなかった私の負い目は大きくなるばかりだった。

そして、ついに帰りのバスの時間になった。レイさんとバスを待っていると、彼女が言った。「震災後、ボランティアがたくさん、来てくれました。でも、ボランティアにもいろんな人がいて、なかには私たちの意向に沿っていないものもあります。そんなボランティアに対して、震災直後、私は一度、キレて、怒りをぶつけてしまったことがあります。でも、そのボランティアさんは微笑みながら、ただ私の怒りを聞いてくれました。その顔は無精ひげが伸び放題でした。お風呂も洗顔もできてない状況で、ボランティアにはげんでくれていることがわかりました。ふと見ると、そのヒゲもじゃの胸に小さな手づくりのかわいいマスコットが付いていました。他の地域のボランティア先で被災者からもらったのかもしれませんが。ヒゲもじゃに似つかわしくないほど、かわいいマスコットでした。それを見ているとなぜか、私の怒りも収まりました。それ以来、私は喋るのは苦手なので、手芸品をつくって、ここに来てくださった方々に贈るようになりました」。

帰りのバスの中で、私は特養ホームで夜勤をしていた頃のことを思い出していた。夜勤に入ると、飴やせんべいなどのお菓子を内緒でくれようとするおばあさんがいた。そんなものは私の給料で買おうと思えば、いつだって買った。そんなものをもらったところで、こちらは特別なお返しをしてあげられるわけじゃないし、お返しをしないといけなくなるし、特別な関係になってしまう。そんな理由からモノを受け取らない職員もいた。しかし、そのときの上司は言った。「行動で何もお返しができない彼女（おばあさん）たちが、たった一つできうるものが、お菓子に気持ちを託して手渡すことでしょう。そのたった一つの行動を簡単に断ることは、それに込められた気持ちを無下にすることであって、それほど冷たい仕打ちはないんじゃないのか」と。以来、私たち職員は少しだけ、お菓子をもらうようになった。そして、モノには気持ちが込められていることを学んだ。

●南相馬の声が聴こえた

この南相馬市で受けたさまざまなもてなしやご馳走、たくさんのモノに込められた彼らの気持ちや想いは何だったのか。やはり、それは昨日のレイさんと自治会長の「……東京オリンピックでますます、ここは取り残されてしまう……」というつぶやきにあるように思われた。「取り残されてしまう」という言葉の裏には「取り残さないでくれ」という切なる想いがあつたに違いない。

それに気づき、ようやく私は南相馬の声を聴くことができたと思った。



除染されず作付不能の田んぼに放置された自動車



3.11 被災者の暮らしを支援する「地域支え合い情報」を知っていますか

被災者の孤立防止や生活復興、まちづくりにつながる被災地各地での実践や、被災支援の経験者のアドバイスなどで構成された情報紙が宮城県仙台市のNPOが中心になって月刊で発行されています。足で集めた被災地の本音と希望が見える情報紙です。

- ・発行：全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
- ・体裁：A4判・16ページ・カラー・毎月20日発行
- ・定価：300円
- ・問合・申込先：CLCへ

TEL 022-727-8730